

自由論題 6「韓国・台湾の経済」・報告 1

報告テーマ

韓国鉄鋼業の技術学習：浦項製鉄所の建設過程から

“Technological Learning of Korean Steel Industry: the Case of Construction of Pohang Steel Works”

氏名(所属)

安倍 誠(アジア経済研究所)

要旨(800字程度)

韓国の鉄鋼業は1970年代から今日に至るまで着実な成長をみせてきた。その成長の大きな契機となったのが、浦項総合製鉄(以下、「ポスコ」)による、韓国初めての銑鋼一貫製鉄所である浦項製鉄所の建設である。浦項製鉄所の建設にあたっては、日本からの資金および技術協力が大きな役割を果たしたことは広く知られている。他方、既存の研究では、韓国鉄鋼業の発展の要因として、ポスコの技術吸収能力の高さが強調されている。しかし、日本による技術指導とポスコの能力の高さの関係は必ずしも明らかになっていない。本研究では、ポスコが浦項製鉄所の建設において、日本の技術協力から段階的に学習することを通じて製鉄所を建設する能力を構築したと捉え、技術協力と能力構築の関係を明らかにする。

日韓双方の公式記録や証言集、および日本側の建設参加者からのインタビュー等を通じて、本研究が具体的に明らかにすることは以下の通りである。浦項製鉄所は4期に分けて建設が進められた。第1期建設は、日本の鉄鋼メーカー連合(JG)と総合商社を中心としたサプライヤーグループによる事実上のターンキー契約によって建設が進められた。しかし、ポスコは計画から施工、立ち上げ操業に至るまであらゆる過程に参加することを通じて学習の機会を得て、第2期の建設においては一部の設計や土木建設など独力でおこなえる領域を広げることができた。続く第3期では当初、ポスコは日本からの協力をほとんど受けずに建設を進めようとした。しかし、建設が大幅に遅れて途中でJGの協力を請うことになった。その原因は、ポスコはこの時点まで建設・操業に関わる様々な技術を習得していたものの、工事規模が拡大するなかで、それに対応できるだけのプロジェクト管理に関わる能力が不足していたからであった。第3期建設中および終了後のJGの指導・指摘を受けて、ポスコは第4期建設において問題の解決を図った。これによりポスコは独力で製鉄所を建設できる能力を持つに至り、1980年代後半には第2製鉄所である光陽製鉄所を建設して世界有数の鉄鋼メーカーへと飛躍を遂げるようになった。